



木木

千葉県 TEACCH プログラム研究会
2013年5月11日 第66号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557

ホームページ : <http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

人権尊重の支援を目指す仲間づくりに一役

千葉県TEACCHプログラム研究会
代表 長 澤 隆 壽

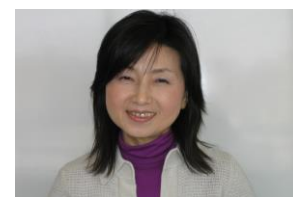
昨年度の後半、大阪の高校生の部活動での事件や日本柔道連盟女子代表メンバーの告発により、スポーツ界に長年に渡って横行していた体罰問題がクローズアップされました。体罰についてはお互いの人権尊重に抵触するものとして、大分以前から禁止されてきた問題なのです。特に体罰を受けた側の苦痛の大きさは他人では計り知れないほどの性格のものであることが、今回の一連の事件で痛感された方が多かったものと思われま

す。このように世間の耳目を一斉に集めた事件報道より半年以上も前、ある新聞で「障害児の体罰や虐待、学校でも・・・」という記事が六段構えで大きく掲載されていたことを思い出し、改めてショックを覚えないではいられませんでした。NPO法人PandA-Jの調査結果を基にした内容でしたが、それによると学校を筆頭に就労先、福祉施設、保育施設と本来、障害のある方の生活の場を整えるべき所でも体罰や虐待が後を絶たないという内容を伝えていました。そのことは、支援者の中には、障害のある方の一人一人の障害の特性を顧みず、いとも簡単に自分の思い通りに従わせようとしている者がいかに多いことを物語っているものでしょう。私たちの身近な同僚の中にも、まだまだそのような人が居るのではないかと不安な思いに駆り立てられないではいられません。

このような状況を各組織から排除するためには、例年、会員の皆様にお願いしていますが、さらに一人でも多くのお仲間をこの会のセミナーにお誘いいただくことが重要なことと考えています。そして、その時に得た情報や知識等を基に支援者一同が互いにかみあった意見交換が展開されることを願っています。そうすることによって、障害のある人の人権を尊重した支援が組織を挙げて推進できるようになるものと考えます。

最後に、本年度もスタッフ一同、会員の皆様のご期待に沿えるように可能な限り当会の企画運営に邁進していきますので引き続きご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

安倍陽子先生の「ティータイム」



藤の薄紫やつつじのピンクなど花の美しさや空の透明感を引き立たせてくれる緑の美しい季節になりました。皆様、爽やかな風が薫る5月の連休を如何お過ごしでしたか？

この美しい季節に、今年度も新たにT研を始められますことを心から感謝申し上げます。初めて会員になられた方もいらっしゃると思いますが、なんと私たちのT研は11年目に入りました！！昨年、この10年間の自閉症支援の変化をお伝えしたばかりですが、また新たな1歩の始まりです。この「ティータイム」のコーナーで

は、T研のことを中心に、個人的なことも書かせていただいています。皆様、今年度もどうぞよろしくお願い致します。

今回は、今年度の私たちT研の活動内容をお伝えしたいと思います。5回の講演会と2回の実践セミナー、そして来年2月の最終回には講演を聴いた方々からの実践発表会を行います。5回の講演会は、前半は基礎編、後半は実践・応用編です。

講演会の初回の講師は、佐々木正美先生です。毎年お世話になっているのですが、先生のお話をいつも楽しみにされている方が多く、一番人気の講演会です。今回もTEACCHプログラムの哲学・理念をお聞きし、繰り返し学び直しましょう。先生はどのような質問にも丁寧にお答え下さいますので、皆様どんどん質問をだしてくださいね。

その後前半の7月には、「テンプル・グランディン～自閉症とともに」というテレビ映画を通してASD（自閉症スペクトラム）の人たちの世界について学びたいと思います。グランディン氏は動物行動学者で、現在はコロラド州立大学の教授です。日本では一般にはあまり知られていませんが、グランディン氏はアメリカでは自閉症を抱えながら社会的な成功を収めた方として知られています。その半生がテレビ映画化され、映画は2010年にエミー賞（米国テレビ芸術科学アカデミー主催）を受賞しました。私は、職場で保護者向けの勉強会を行っているのですが、グランディン氏が来日したときの講演録をもとにお話をしています。今回は、この映画を通して、皆様とご一緒に学べれば・・・と思っています。

同日に行われる3回目の講演会は、諏訪利明先生から、TEACCHプログラムの最前線と構造化された指導について学びます。皆様ご存知のようにTEACCHプログラムの所長は、ゲーリー・メジボフ氏が退職されて、新しく女性のローラ・クリンガー氏が所長になりました。新生TEACCHとして、変わったところも出てきています。その変化や変わらず大切にされているところなども先生にお伝えいただけます。

秋からは、実践応用編として保護者と成人担当の支援者の方から療育や支援の実際をうかがいます。今年度は、学校関係者のお話がないのが残念ですが、その分、T研のスタッフが、より実践的に学校関係者のニーズに応えたいと頑張っています。

実践セミナーは、6月にTTAP、12月にPEP-Rの講習会を行います。それぞれ、TEACCHが作った検査で、おおまかに前者が青年成人期向け、後者が学齢期向けです。実施法から、検査後の読み取り、IEPやIHPにどのように反映させていくのかなども講師の先生から教えていただけます。

以上、簡単にご紹介させていただきました。今年度も総会の後に、佐々木先生のお話から始められることをとても幸せに思います。皆様、今年度もご期待です！！

平成25年度 TEACCHプログラム研究会 第2・3回連続セミナーのお知らせ

期日：7月14日（日）

場所：千葉県教育会館 大ホール（千葉市中央区4-13-10）

第2回連続セミナー 10:00-12:30（受付開始9:30）

映画：「テンプル・グランディン～自閉症とともに」
～テンプル氏の半生から、ASDの世界を学ぶ～

解説：安倍陽子氏（横浜市東部地域療育センター臨床心理士）

第3回連続セミナー 14:00-16:30（受付開始13:30）

「TEACCHプログラムの最前線～理念と構造化された支援を学ぶ～」

講師：諏訪 利明 氏（川崎医療福祉大学 准教授）

今回は午前午後、別々のセミナーを計画しました。会場は、午前午後とも同一会場です。お待ちしております。

（編集後記）平成25年度の千葉T研セミナーがスタートしました。今年度の連続セミナーも、多方面で活躍されている方々を講師として呼び出して様々な実践等をお聞きしたいと思っています。また、TTAP検査及び評価の実習、PEP-R検査及び評価の実習も計画しております。皆様の御参加をお待ちしております。一人一人のASDの方々が幸せに暮らしていけるよう、よりよい支援について、今年も一緒に勉強していきたいと思っています。（山中）

第6回 連続セミナー 実践報告会 平成25年2月16日

24年度最後の連続セミナーは、ノースカロライナにおけるTEACCHプログラムの最新の報告や学校・成人施設の職員の方からの実践等を発表していただきました。発表者の皆様には、お忙しい中、発表のスライド及び資料を作成していただきありがとうございました。多くの受講生が明日からの支援のヒントや「明日から自分も頑張るぞ」という意欲をもらうことができたと思います。



報告1：「TEACCHセンター研修報告」 千葉県発達障害者支援センター 縄岡 好晴氏

アメリカノースカロライナ州 チャペルヒル/シャーロット
TEACCHセンターでの研修について報告していただきました。
様々な見学地の様子を紹介していただきながら、

TEACCHプログラムの基本理念「プログラムの最終的目標はASDの人の自立であること」、新ディレクター、ローラ・クリンガー博士のもと「名称がTEACCH自閉症プログラム（TEACCH Autism Program）」となったこと、TEACCHの略称のもとになった意味も変更され、新たなコアバリューとして（※2014年1月より正式に表明）「Teaching（教育・教える）、Expanding（広がり・啓発）、Appreciating（正当な評価）、Collaborating（協力）& Cooperating（連携）、Holistic（包括的な支援）」となったこと等を報告していただきました。

最後に「TEACCHプログラムは方法論ではなく、ASDの人たちの生き方を考える理念である」「TEACCHプログラムを正しく理解することが大切である」と話されました。

最新のTEACCHプログラムの報告を聞いて、今でもASDの人のために現在進行形で進んでいるTEACCHプログラムは素晴らしいと感じる報告でした。



報告3：「受注班 ～かつおぶし作業～」 社会福祉法人 いちちょうの里 みずほ学園 遠藤 雅史氏

勝浦市にあるかつおぶしの「株式会社サラヤ保崎商店」からの受注で仕事をしている「かつおぶし作業」について報告していただきました。受注班は24年度からスタートした班だということで、一年間、試行錯誤を繰り返してきたとのことでした。衛生面において特別な配慮を必要とする「食品を取り扱う作業」ということもあり、今年度はメンバーの選定についても十分検討されたようです。作業工程は大きく七つあり、工程ごとに分担をして作業に取り組んでいました。作業に取り組む中で、一つ一つの工程でたくさんの問題点が挙げられました。「衛生面のこと」「計量や微調整等の作業にも自立的に取り組めるようにすること」等、一つ一つの課題に対して課題分析を行い、できることを増やしていったそうです。場所の工夫や材料・道具の置き場所等、具体的に画像や映像を使って紹介してくださいました。一人一人のASDの人に合わせた作業における「自立」の意味、そして「構造化→評価→再構造化」の流れを実践された報告でした。



報告2：「私たちが伝えたいこと ～自立課題作製研修を通して～」 千葉県立東金特別支援学校 金坂 京子氏

連続セミナーでの講師のお話の中で、「ASDの子どもにとっての『自立』の意味が学校内で理解されていないことが多い」「自立課題を行うことの意義や作製・実施の仕方について共通理解が図られていない」ということが話題に挙げられます。そこで、数年前から千葉T研スタッフが夏季休業中に自立課題作製研修会を開催してきました。今回の発表では、平成24年度に開催した研修会の受講生アンケート調査（前・後・後日3回）から、自立課題の意義や実施方法等の理解状況や研修後の自立課題活用状況、研修会の有効性、今後の方向性について報告がされました。成果として「受講生一人一人は、ASDの特性を理解し、スケジュールや自立課題、ワークシステムについても少しずつ理解が深まってきている」ことが挙げられ、反面、実践中の困難さとして「個々に応じた自立課題が作製されているか不安」「教材で遊んでしまう」「作製する時間がない」ことが挙げられました。以上のことから、まとめとして「今後は『子どもたち一人一人の特性のさらなる把握と特性や発達段階に合った自立課題の作製』『教職員の多忙さ』に対応できる自立課題作製研修（出前講座を含む）を積極的に行っていく。そして子どもたちの自立を促していきたい。」と話されました。



報告4：「Aさんの挑戦 ～できることから一つずつ～」 社会福祉法人 ロザリオの聖母会 佐原聖家族園 平野 純氏

地元主催の香取小江戸マラソン大会に初めて参加することになった同園に通所されているAさんへの支援についての報告でした。マラソン大会に参加するにあたって、Aさんの特性や現在の園での様子、家庭での様子や昨年まで在学していた特別支援学校での様子など、情報収集を丁寧にされ、Aさんにとってどのように支援していくことが適切なのか、かかわる職員全員でたくさん話し合いが持たれていました。その中で「どのようなスケジュールを作成し提示するのか」「マラソン練習はどのように取り組むのか」「大会コースの試走はどうするのか」具体的な方策が練られ、当日を迎えられました。受付からスタートまでの待ち時間が長く、ざわざわとした雰囲気や苦手であることから、スタート直前までAさんは車中で待機する等、細やかな配慮がなされる中、Aさんの御家族の他、地元の人々の声援を受けながら、Aさんは無事、完走されたそうです。ASDの人の楽しみを見つけることや経験の幅を広げることの大切さ、ASDの人にとって見通しがもてる支援の大切さを実感したと話された平野さんの熱い思いに勇気もらった報告でした。